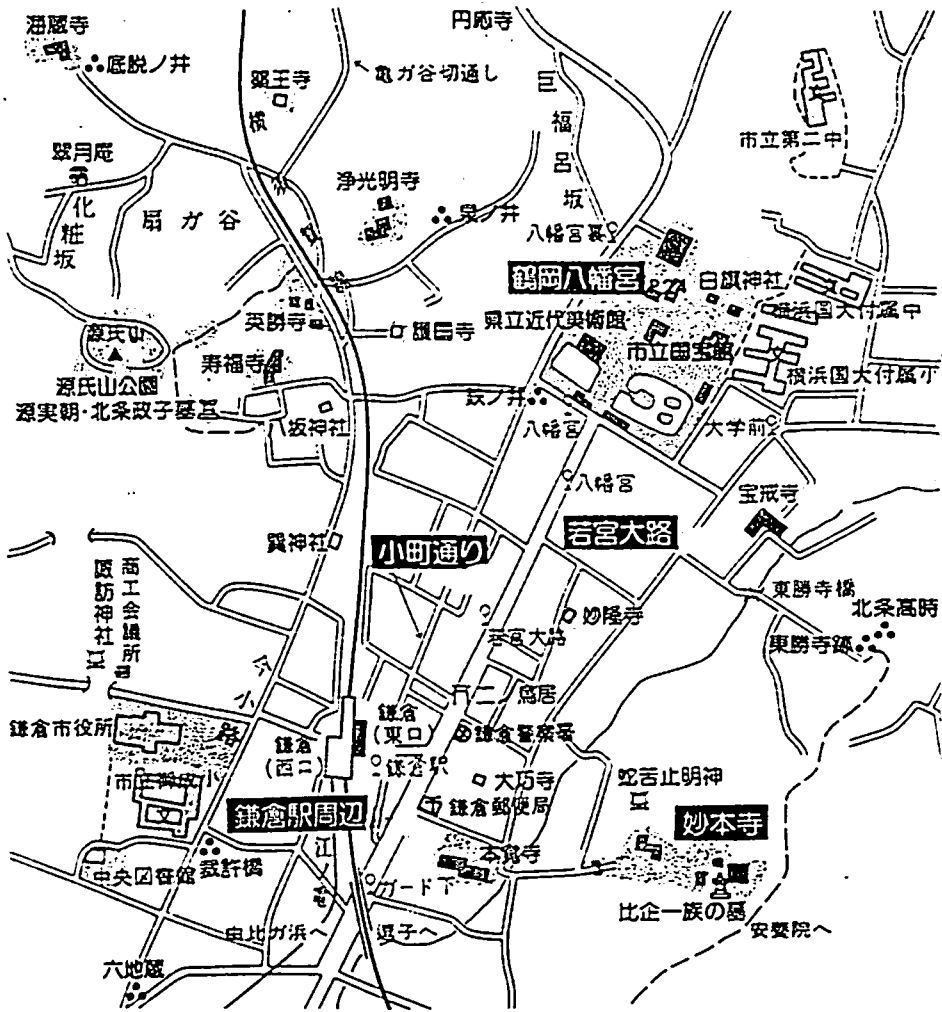


平成四年十一月一日(日)

第一九五回 史跡めぐり資料

鶴岡八幡宮 属ヶ谷かいわい

越谷市郷土研究会



○第一九五回 史跡めぐり ご案内
 鶴岡八幡宮 扇ヶ谷かいわい

とき 平成四年十一月一日(日)

集合 南越谷駅前 午前八時

乗車 八時一五分

コース 南越谷駅→△武蔵野線→南浦和駅→△京浜東北線→東京駅→△東海道線→戸塚駅→△横須賀線→鎌倉駅→段葛→鶴岡八幡宮→鎌倉国宝館→鉄ノ井→浄光明寺→昼食→海蔵寺→寿福寺→小町通り散策→自由行動→鎌倉駅→△横須賀線→新橋駅→△地下鉄銀座線→浅草駅→△東武線→越谷駅

参加費 四、五〇〇円

ご案内 幹事 宮川 進

鶴岡八幡宮

御祭神

應神天皇

比賣神

神功皇后

鎮座地

神奈川県鎌倉市雪ノ下二丁目一番三十一号

例大祭

九月十五日

御由緒

建久二年十一月二十一日 丙寅 天晴 風静

鶴岡八幡宮並に若宮及び末社等遷宮なり。和田義盛・梶原景時等隨兵を率い、辻々並に宮中を警衛す。其の後頼朝(御東帯・帯剣)御参宮あり。北条義時御剣を持ち、御座の傍に候す。(中略)すでに殿内に遷し奉る。多好方、宮人曲を唱し、頗る神感の瑞相あり。

これは「吾妻鏡」に見える御遷宮の記事である。大臣山の中腹に始めて本宮が出来て、現在のような面目に改まったのはこの時、すなわち建久二年(一一九一)であつた。明治以来、この十一月二十一日を当宮の御鎮座の日とし、太陽曆に換算した十二月十六日に、その記念祭を執行し、当時のままに「宮人曲」の御神楽を奉奏している。

しかし、鶴岡八幡宮の歴史は実際にはもっと古く、源頼義の事蹟から始まる。

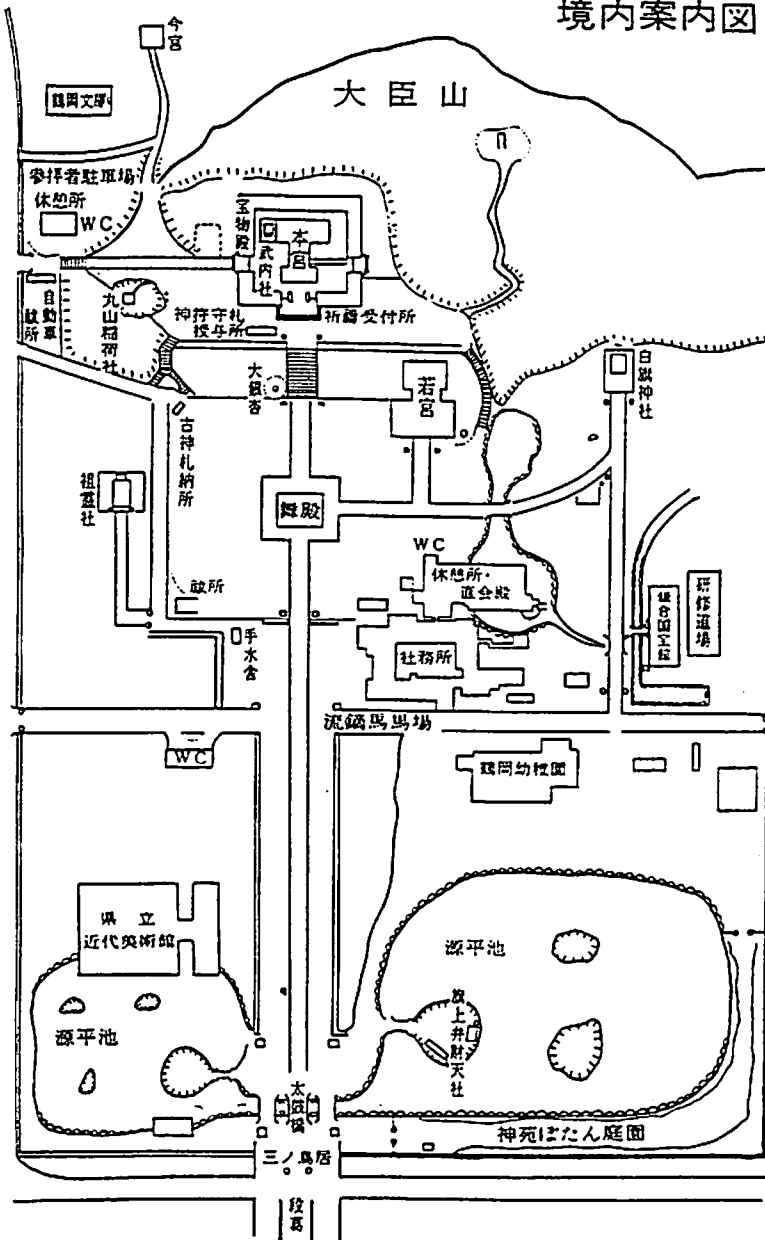
頼義は康平六年(一〇六三)奥州を平定して鎌倉に帰り、源氏の氏神として、由比郷鶴岡の砂丘に八幡宮をお祀りした。この時丹塗弓・白羽矢など(現在国宝)を神殿に納めた。その子八幡太郎義家も深く尊崇して、社頭の修営につとめていた。このような父祖の縁故で治承四年(一一八〇)頼朝は鎌倉に進出すると、まずこの海浜の八幡宮を遙拝し、家運の隆昌を祈り、神意を伺つて現在の境内にこの宮を遷座した。これを鶴岡若宮と申した。

頼朝は自分の居所である幕府をこの若宮の東側に構えるほどに、この宮を関東の総鎮守として掃依の心を形にあらわした。だが、建久二年(一一九一)の三月、町屋から火災が起り、社殿も延焼した。頼朝は直ちに大臣山の中腹をけずり、前記の如く上宮を建てて本宮とし、従来の宮のところに下宮を建てて若宮とし、今日のように本宮、若宮を中心にした上下両宮の姿になつたのである。当時の文化の粋を関東に移して成就した最初の大事業ともいふべきで、この時以来社頭は面目を一新した。頼朝はこのころすでに天下を治め、鎌倉は事実上京都に並んで政治の中心になつていた。そこで丹誠をこめて崇敬を厚くし、荘嚴を尽して国家の宗祀にふさわしく整えたのであつた。

このように鶴岡八幡宮は長い歴史のうちに、源頼朝のなみなみならぬ真心によつて完成されたのであるが、鎌倉が開けた時から、町の中心に心のより所として奉斎されてきたわけである。

鶴岡八幡宮を京都の内裏と同じように仰ぎ、若宮大路を朱雀大路にならつて社頭から真直ぐに海岸まで作つた。これは表参道であるとともに京都へ向う東海道の基点となり、また、鎌倉の都市計画の基本線となつた。

境内案内図



段 葛 段葛。鎌倉のメインストリート
 ト若宮大路の中央に二条の堤を築き、その
 基部に葛石を敷いた参詣路。寿永元年（二
 三）三月、頼朝が鎌倉の都市建設の第一歩
 として、あるいは政子の安産祈願をかねて
 造営した。「吾妻鏡」は頼朝自身が監督し、
 北条時政以下の諸将が土石を運んだと伝え
 る。段葛という名称は江戸時代の記録から
 みえる俗称。置路ともいわれ、室町期に
 は置石・作道せきぢなどと称した。段は壇
 であり、葛は壇などの上方にあつて縁石
 を兼ねる石であるから、土壇の上に葛石
 をおいて造った道という意。特殊な形の置
 路は京都の大内裏陽明門などにもあつた
 が、姿を消し、今では段葛がわが国唯一の
 置路の遺例となつた。はじめ鶴岡八幡宮の
 社頭から由比ヶ浜まで造られたが、明応四
 年（一四九五）八月の地震による洪水で破壊さ
 れたりして、幕末には下馬しもままでとなり、
 ついで明治十一年の官有地編入によつて二
 の鳥居以南を失つた。ことに明治二十二年
 の横須賀線の工事で著しく、その形を変え
 た。全長約五四〇メートル余。段葛（参道）
 は鶴岡八幡宮境内の一部である。（三浦）

橋の下の細い水路でつながっている池が源平池で、左手（西側）が平家池、右手（東側）が源氏池と呼ばれている。平家池には平家の旗にちなんで赤蓮を、源氏池には同様に白蓮を植えたというが、これは西国の平家、東国の源氏を意識してのものだろう。

平家池には池の面に乗り出すように近代美術館（昭和二十六年竣工）が建てられている。一方、源氏池に浮かぶ小島には旗上げ弁天社がまつられている。

橋を渡って杉並木の参道を進むと、参道を左右に横切る一条の道がある。毎年九月十六日にここで流鏝馬の神事が行なわれるので、「流鏝馬道」あるいは「流鏝馬の馬場」と呼ばれている。

静の舞い その先の一段高い庭にあがると中央に朱塗りの舞殿がある。源義経の愛妾静が舞ったというのがこの社殿で、下の宮あるいは若宮とも呼ばれている。

義経が兄頼朝の追及をうけて身をくりましたのち静が捕えられて鎌倉へ連れてこられたのは文治二年（一一八六）二月のことであった。この年四

月八日、頼朝は政子とともに八幡宮に参拝したが、その折り政子が、

「かの静という白拍子は今様の上手と聞きます。ぜひ見てみたいもの」

と所望した。静は再三ことわったが、とうとうことわりきれずに一曲舞うことを承知した。工藤祐経が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子をつとめる。

頼朝、政子夫妻をはじめ、あまたの御家人たちが見守るなかで静は、

吉野山峰の白雪踏み分けて

入りにし人のあとぞ恋しき

しづやしづしづのをだまきくり返し

昔を今になすよしもがな

と、吉野山で別れ別れになった義経への恋慕の情をこめて歌い、かつ舞った。その美しさ、見事さに万場は水を打ったように静まり返った。

ところが頼朝は、天下の罪人を臆面もなく恋う歌をうたうとは何事か、と怒った。それをなだめたのが政子であった。

「石橋山の戦で敗れたあなたが安房へ逃れられたとき、わたしはひとり涙に泣いていました。あのときのわたしの気持と、九郎殿を慕う静の気持に

とそれだけの違いがありました。」

そこで頼朝も機嫌をなおし、静に衣を与えてその舞いを賞したという。そのとき静が舞ったのがこの社殿だというのが、当時は石段上の社殿はまだ建てられておらず、現在の舞殿のあるところに本殿があったらしい。

* 鶴岡八幡宮(本宮)・上宮(上宮)・押殿 *

祭神 応神天皇・仲哀天皇・神功皇后・比賣大神

一一九一(建久二年)に若宮八幡宮が火災に遇つて焼失したため新たに石清水八幡宮から御神体をお迎えして祀ったのが、この上宮で、若宮(下宮)とは祭神が異なっている。江戸時代までは「八幡宮寺上宮」と呼ばれていた社殿で、現在の社殿は一八一四(文政十一)年に徳川幕府十一代目の將軍・徳川家斉が造宮したものである。総朱塗りの権現造りで、社殿手前には左右に隨身像を置いた楼門があり、周囲に回廊をめぐらしている。

* 鶴岡八幡宮(宝物殿)回廊 (なお、この回廊は現在、神輿など鶴岡八幡宮の数多くの社室を陳列した宝物殿となっている。)

* 丸山稲荷社 *

本殿西の山を丸山といい、その山の上、もと松ヶ岡明神という古社があった跡地にある稲荷社で、「流れ見世棚造り」の社殿は、室町時代中期の建造物で、鶴岡八幡宮境内の建造物の中で最も古く、「国指定重要文化財」にまつている。

なお松ヶ岡明神は別名を「地主明神」という。それは鶴岡八幡宮上宮に建つ前は、ここ松ヶ岡に鎮座していた明神で、鶴岡八幡宮上宮にその地を譲ったところから来た名である。

* 若宮神社(下宮) *

祭神 仁徳天皇・履仲天皇(皇治皇子)・仲媛命(久禮)・磐之媛命(宇禮)

(仁徳帝の皇子と姉妹)

本殿へ昇る石段の東にある神社で、一一八〇(治承四年)十月に源頼朝が、材木座二丁目元八幡を遷して、ここ鶴岡八幡宮の起りとした神社で、そのときの社殿は一一八一(養和元年)に武州浅草(東京都浅草)の工匠が招かれて建造したものだといふ。そのときの社殿には回廊があつて、一一八六(文治二年)四月八日、源頼朝と政子夫人は、この社に参詣して、この回廊から、神楽殿で舞う静御前を見物したと伝えられ、また一一八八(文治四年)二月二十八日の臨時の流鏑馬も、この回廊から見たと記録されている。現在の社殿は北条氏綱が再建した室町時代末期の様式を伝える権現造りの本殿・幣殿・押殿がある。

* 白旗神社 *

祭神 源頼朝・住言大神

若宮神社の東の社殿がそれで、頼朝の木像を祀っており、頼朝の子で鎌倉幕府二代將軍を継いだ頼家の創建である。

一一九〇(文治十八)年七月に皇孫秀言が鶴岡八幡宮に参詣したとき、この神社に参拝し、頼朝の木像の肩をたたいて「天下ヲ掌ニ握リシハ足下ト我レトノミ、足下ト我レトハ天下ノ友アリ」と云ったという逸話が伝えられている。

* 源実朝と、その歌碑 鎌倉国宝館の南に一つの歌碑がたつている。源実朝の生誕七三〇年を記念して一九四二(昭和十七)年八月に、鎌倉ペンクラブの人びとが建てたもので、次の歌が刻んである。文三は、藤原定家が筆写した実朝の歌集「金槐和歌集」から取ったものである。

山はさけうみはあせなむ世なりとも

君にふた心われあらめやも

源実朝は幼名を千幡といい、源頼朝が征夷大將軍になった一カ月後の一一九二(建久三)年八月九日に、將軍の次男として生まれ、兄の頼家が一二〇三(建仁三)年九月に修善寺に幽閉されたあとを承けて鎌倉幕府三代將軍になった。ところが政治の実権が北条氏にあつたため文の道を選び、『新古今和歌集』の撰者藤原定家と親交を深めて和歌の道に励み、一二二二(建保三)年に『金槐和歌集』を著している。年わずかに二二歳のころである。このように公家(貴族)の氣風を志向して官位を望み、右大臣にまで昇進したが、それを大江広元に諫められると、日本での生活を諦めて中国大陸への渡航を計画し、宋の陳和卿を鎌倉に招いて一二二六(建保四)年一月に由比ヶ浜で大船の建造に着手した。しかし此の海岸が遠浅だったため大船を浮かばせる工夫が着かず、翌年四月、ついに断念した。鶴岡八幡宮での実朝の不慮の死は、じつに、その二〇カ月後のことである。

鎌倉国宝館(鶴岡八幡宮境内)

鶴岡八幡宮社務所の東側、白旗社の南側にある建物がそれだ。鉄筋コンクリート造であるが宗良の三倉院を模した「校倉造り」である。一九二二(大正一三)年九月一日の関東大震災で鎌倉の多くの寺社が損壊し、貴重な文化財が損失・損傷したので、各寺社と市民の要望で鎌倉市内の寺社社宝の文化財を保護保存するため一九二八(昭和三)年に建てられた。

旗上弁天

源氏池の中の島にある弁天で、一一八一(養和元)年に、この地に祀られたというから源頼朝が鎌倉に入って間もなくの祭祠である。この「辨財天坐像(現・鎌倉国宝館像)」「画像・木像ともに日本の辨財天を代表するもので、インドの河の女神サラスヴァティーが日本に伝えられて市寸島比賣ら宗像の三姫神と習合し琵琶を弾く美女像となった典型的なもの。木像は鎌倉時代

の仏師・運慶作のもので、際にのせている琵琶は、もと平ノ重盛のものだったと『新編相模風土記稿』は伝えている。神仏混淆の祠宮であつたため明治維新で一時無くなっていたが、のち再興された。なお旗上弁天の由来は、承久の変のとき社前で京に向かう兵が出陣の旗上げをしたためだという。

鉄の井 さきに鶴ヶ岡八幡宮から若宮大路を境にして東側を歩いたが、今度は西側を巡ってみることにしよう。

八幡宮の三の鳥居を西へ行くと、北鎌倉から来る道が小町通りに入る丁字塔にぶつかる。その角に鎌倉十井の一、鉄の井の跡がある。むかし、この井戸の中から鉄の観音の首が掘り出されたところから、この名があるという。『言妻鑑』によると正嘉二年(一二五八)正月十七日、秋田城介泰盛の甘縄の屋敷から出火し、南風にあおられた火は薬師堂の裏山を越えて寿福寺のあたりまで焼き尽したという。この観音像はその折りの火災で土中に埋れていたものが掘り出されたのではないかとされている。

承久元年（一二一九）一月二十七日、三代將軍実朝の右大臣拜賀の礼が神殿で行なわれた。あいにくとこの日は、積雪二尺という悪天候になった。暮れやすい冬のそれも夜になって退出、下までわずか十数段の石段を残すところまできたそのとき、袿つらぎを頭から被った阿闍梨公暁が、このイチヨウの蔭からおどりでて実朝を刺殺し、首を刎ねた。公暁は俗名善哉といい、祖母北条政子のために伊豆に幽閉され、修善寺で謀殺された二代將軍頼家の子、そしてその政子のはからいで建保五年（一二一七年）六月二十日、八幡宮別当に任ぜられたまだ十八歳の少年であった。



鶴岡八幡宮の大銀杏

公暁はただちに後見人である備中阿闍梨の雪の下の北谷の住坊におもむく。そこで三浦義村に使いを出して自分を將軍にするよう取り計らえと伝えた。ところが北条義時は、義村に逆に処分を命じた。義村の使いが遅いので、公暁は鶴岡八幡宮寺の後の山に登って、三浦義村屋敷に行こうとしたところで、長尾定景の手

にかかり殺された。

これで鎌倉源氏の正統はわずか三代・二十七年（頼朝が鎌倉入りをしてから三十九年）でまったく断絶した。それも最後の源氏を源氏みずからの手であやめ、権謀術数の限におちて滅びてい

った。北条氏が心底深く謀っていた北条時代が、名実ともものものになった。八幡宮寺もまた北条氏との関係を深めていく。

暗殺の怪

ところがこのときの状況を、別に説明するものに、つぎのようなものがある。公暁は衆にすぐれた武芸者であったというが、当日は錚々たる武將三十名が随行者とあり、正月拝賀のため、すべて武装はしていなかったといっても、公暁ひとりを防ぎ止められなかったものか。また一千余名の武装警護が配置についていたといわれるが、だれも手をだしていないようだ。まして公暁は首をもって、逃げこんだ先でゆうゆう晩食をとっている。追手は各所を探りまわったあげく、ようやく居所をつきとめた。召し捕りにゆくと、そこで公暁に加担する倍たちと一戦を交える。ここでも公暁は逃げてしまう。それからまたあちこちを探す。やがて公暁の外出をねらい、ようやく討ちとっている。だがこれよりさき、実朝を倒す祈願に八幡宮へ千日参籠をさせたり、別当の身で刀をさげた怪行動が許されたり、それに凶変でごったがえす石段で、武芸者といっても公暁ひとりで実朝の首を刎ね、しかも持ち逃げすることが可能だったかどうか。まして公暁逮捕に、わずか二キロ程度の行動範囲の鎌倉市内で、長時間をかけている。こうしてあれこれみると、公暁のこの行動の裏には、黒幕の大物が策略をめぐらしていたことも考えられてくる。そこで公暁召し捕りも相手方との政治的折衝などで手間どった、と見るべきであろう、というのである。

しかし、公暁がイチョウの蔭にかくれて……という物語の記述は、江戸時代にはいつてからはじめて現われてくることであって、あるいはこれは劇的效果をねらった後世の脚色ではあるまいか、ともいわれる。

浄光明寺(扇ガ谷二丁目一、一二番)

有島武郎旧居前を通り泉が谷を更に東へ一〇〇mほど行った左手にある寺で、門前左に「冷泉為相卿旧址」の石碑がある。京都市東山区にある泉涌寺を本山とする古義真言宗の寺で、山号を泉谷山という。一二五一(建長三年)のとき武蔵守で、のちに第十一代執権になった北条長時が真阿上人を開山にして建立した寺で、一二三三(元弘三年)十二月、後醍醐天皇の勸願寺になった。始めは浄土宗であったが、この頃から江戸時代までは真言宗・天台宗・禅宗・律宗の「四宗兼学」の珍しい寺であった。なお、いまは真言宗である。

また建武ノ中興のあと、一二三五(建武二年)鎌倉に下った足利尊氏が反逆の疑いを受けて、後醍醐天皇から新田義貞を將軍とする追討の軍を差し向けられたとき、尊氏は戦おうとはせず出家して天皇に恭順の意を表明しようと細川頼春・上杉重能ら二三名の側近の人たちと謹慎していた寺を「太平記」は「建長寺」としているが、事実は、ここ浄光明寺であった。

寺域は三〇〇mほどで、山門を入った平坦地に客殿・庫裡を中心にして不動堂・祖師堂と稻荷社が立ち並び、本堂は、これより一段高い処、客殿わきの道を登って基地を通り抜けた山腹の崖下に建っている阿弥陀堂である。

この阿弥陀堂に安置されている本尊の「木造阿弥陀三尊」は一二九九(正長三年)の銘があり「阿弥陀立像」は高さ一四四cm、脇侍仏の「聖観音立像・勢至菩薩立像」は高さ一〇七cmで、国の重要文化財の指定を受けている。このほか寺宝には玉眼入り高さ七七cmの「寄木造り彩色地藏菩薩立像」があり、南北朝時代の作で神奈川県的重要文化財に指定されている。また、不動堂の本尊・不動明王像は、源頼朝に平家打倒の拳兵を進めた文覚上人が、京都から背負って来たものと伝えられている。

本堂から、さらに北へ登った処にある巖窟の中には、由比ヶ

浜の海で網に引つ掛かって海中から出現したので、その名が付いた「綱引地蔵」が安置されており、そこからさらに五〇mほど登った尾根上に「冷泉為相基」の宝篋印塔が建っている。

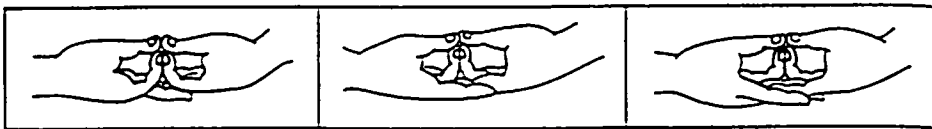
また冷泉為相基の北東一〇〇mほどの処は「多宝寺跡」で、そこには国の重要文化財に指定されている「覚賢塔」と呼ぶ高さ三・二六mの石造五輪塔が建っている。

この寺は建長三年(一二五一)北条長時が真阿上人を開山として開基したものだ。鎌倉幕府が滅びて後の建武二年(一二三三)足利尊氏は鎌倉に下ってこの寺に入り、後醍醐天皇に叛いて拳兵すべきか否か、思案にくれていた。尊氏が第二の北条氏になるのを怖れた天皇は新田義貞に命じて尊氏討伐の軍を向けている。これを迎撃した弟の直義は三河(愛知県)の矢矧川やせがわで大敗を喫し、鎌倉へ逃げ込んできた。この有様に尊氏もついに意を決し、拳兵に踏みきるのである。吉野の南朝と京の北朝が並び立つ、いわゆる南北朝の動乱は、尊氏がこの寺から出陣したときに始まったといっている。

<阿弥陀如来> 阿弥陀如来は無量寿如来・無量光如来と漢訳される。それは、梵語の Amita が量ることのできない（無量・無限）という意味で、阿弥陀如来は寿命無量、光明無碍の仏だからである。

無量寿経によると、阿弥陀如来も釈迦と同じくインドの王族の太子で、出家ののち法蔵菩薩となった。そのとき48の願をおこし、その大願を成就して仏となり、西方極楽浄土の教主になったという。四十八願のうち第18願の念仏往生願は、もっとも大切なので、弥陀の本願というが、念仏を行なう者は必ず往生させるという誓いである。大乘教典成立の初めのころからあった阿弥陀信仰が、日本の藤原時代にさかんになったのは、世が末法にはいったと信じる人びとが、今もなお西方浄土で教えを説く阿弥陀仏にすがって極楽に往生したいと希求したからであろう。

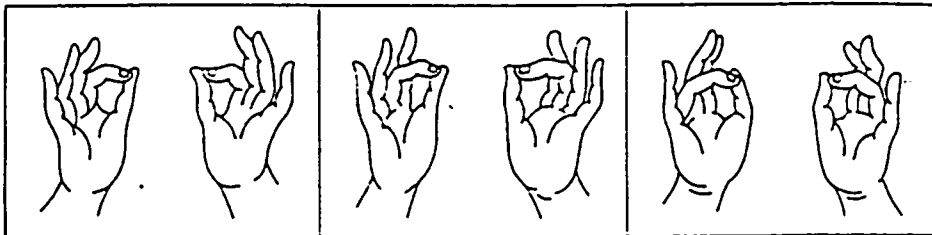
九品印 阿弥陀如来に特徴的な印相。阿弥陀如来を念ずる者は死後、必ず弥陀に迎えられ、極楽浄土にうけいれられる（来迎引接）。その際、往生者の信仰の深淺や罪業のいかんによって九つのランク（九品）があり、往生に九品往生、極楽に九品浄土の別があって、阿弥陀如来にも九品の弥陀が区別され、それが印相に示されるのである。上図のように上生印は弥陀定印（心の安定を示す）、中生印は説法印、下生印は来迎印で、拇指につける指が食指・中指・無名指のいずれかによって、上品・中品・下品のちがいを生じるのである。このうち、上品上生印は妙観察智印ともいい、坐像の多くはこの印相で、立像では上品下生印がふつうである。



上品上生(弥陀定印)

中品上生(弥陀定印)

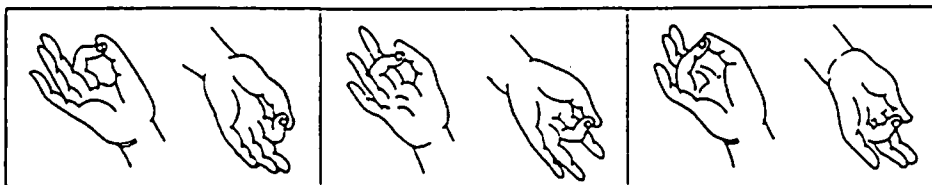
下品上生(弥陀定印)



上品中生(説法印)

中品中生(説法印)

下品中生(説法印)



上品下生(来迎印)

中品下生(来迎印)

下品下生(来迎印)

九品の印相

宋風彫刻について――

○宋風彫刻については、鎌倉前期から鎌倉地方に流入していた。代表作は大仏と円応寺の初江王像である。

○宋風彫刻にも、いろんな要素があるが、もつともめだつのは、裝飾性の強さと、仏菩薩の顔形の人間臭さである。この特色を典型的にそなえる作品としては、浄光明寺の木造阿弥陀三尊像があげられる。正安元年（一二九九）ごろ造立された像は、まず三尊とも丈高い台座にのり、その台座蓮弁に克明に筋を刻む点が注意をひく。こうした蓮弁をもつ台座は、従来の台座上にはなやいだ効果を生む。

○像の方は、中尊はおだやかな丸顔で指には長い爪を表現し、観音・勢至両菩薩は面長な女性的やさしさにみちた容貌につくられ、髪もみごとに結び上げ、上体をややかしげてくつろいだ姿勢をとるなど、總体に絵画的な自由さが強い。

○しかも、中尊着衣のいたるところに土紋を貼りつける。ねった土を花とか輪宝などの雌型にいれてつくった文様を、適宜衣に貼る裝飾法が土紋で、刺繍や浮彫に似た立体的ななややかさを生む。

里見弾・有島武郎（扇谷二丁目一〇番）

護国寺前の道を八〇mほど北上して突き当る丁字路の正面は作家・里見弾氏の旧邸・怡吾庵があり、その東隣は、里見弾の兄で「白樺派」を代表する作家・有島武郎が住んでいた処であった。

上杉屋敷 英勝寺の前にある踏切りを渡ってすぐ右側に太田道灌の名家である扇谷上杉氏屋敷跡の碑が立っている。鎌倉六代將軍宗尊親王に従って鎌倉に下った勸修寺重房が上杉氏の祖で、やがてその子孫が扇谷、託間、犬懸、山内の四家に分かれた。しかし託間家は山内家に吸収され、犬懸家は禅秀の乱（一四一六）で滅び、結局、山内家と扇谷家が並び立ち、対立を深めた。

扇谷定正の家宰太田道灌の登場で扇谷氏の勢いが強くなると、山内顕定は定正をそそのかし、道灌が主家を乗取ろうとしていると吹きこんだ。これを真にうけた定正は文明十八年（一四八六）七月、糟谷館（神奈川県中郡）で道灌を謀殺する。道灌は「当家滅亡」と絶叫して息絶えたが、その予言通り、道灌を失ったからの扇谷氏の勢威は急

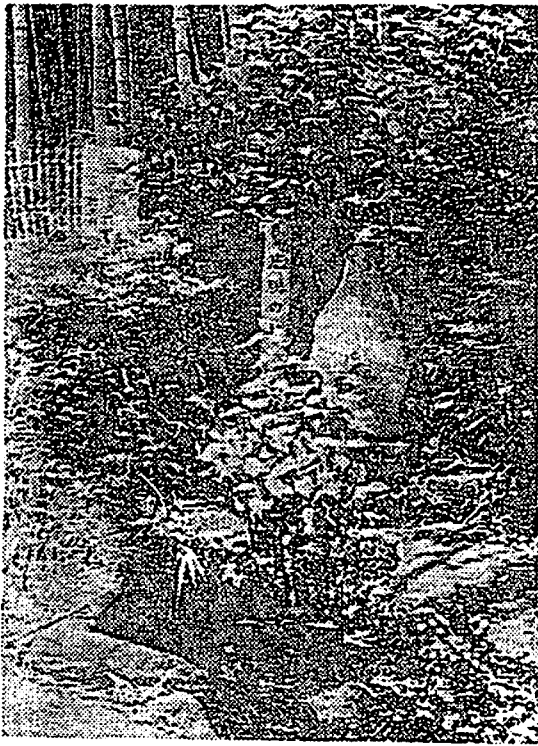
この尼こそ、かつての安達泰盛の娘の（千代乃）ちよのう姫、幕府の四番引付の頭人金沢流北條頭時の妻室、六浦殿であった。

弘安合戦にさいして、父や兄弟から親戚縁者にいたるまで討ち果たされ、侍みの夫金沢頭時は、これに縁座して下総埴生荘に配流されて行った。

十一年後の永仁四年（一二九六）、頭時は赦されて鎌倉に戻ってきた。しかし、すでに彼女は離別の身であり、出家の身であった。覆水は、ついに盆には帰らなかった。

このとき彼女が詠じたのが、ちよ（千代乃）のうが、いたゞく桶の底脱けて水たまらねば 月もやどらず

自嘲や皮肉は、この和歌にはない。ちよのう姫、時代を回想しながらも、それと引きくらべて現在の哀れな境遇を哀れとも見ていない。むしろ、そこには現実を達観した素直な目があり、自分の失敗を自分で笑って見ており、おかしさをこらえきれずに詠じたという不思議な明るささえ感じられる。



底脱の井

その後、この井戸は「底脱の井」と呼ばれ、鎌倉十井の一つに算えられるようになった。今も亀谷山海蔵寺惣門のわきに、ひっそりと水をたたえて残っている。

ちなみに、彼女は婚家金沢流北條氏のもとに二人の男子を残してきた。嫡男が、鎌倉武士の中でも好學で知られた貞頭である。嘉暦元年（一三三六）三月には、幕府の執権という重職にも就任したが、あたりをはばかって、わずか十日後に辞任している。

海蔵寺 底脱の井の前にある海蔵寺の小さな山門をくぐると境内のあふれるような緑につつまれて左手に薬師堂、正面に本堂がある。扇谷上杉氏定が応永元年（一三九四）玄翁空外を開山として創建した寺だ。

本尊は薬師像だが、俗に「啼き薬師」と呼ばれている。寺の裏山で夜な夜な子供泣き声がある。玄翁和尚が掘ってみたところ薬師の頭部が出てきた。そこで新たに薬師如来像を刻み、胎内にその頭部を納めたと伝えられる。

玄翁和尚にまつわる伝説としてはもう一つ、那須野の殺生石の話が有名だ。近衛天皇の寵愛をうけていた玉藻の前という美女があったが、じつはこれが狐の化身で、正体が現われて東国へ逃げ、那須野ヶ原で殺された。しかし今度は石と化してこの石に近づくと人でも鳥獣でもすべて死んでしまう。そこで人々は殺生石と呼んで恐れていた。これを聞いた玄翁は人々の難儀を救おうと那須野に赴き、槌をもって一撃のもとにその石を粉砕した。以来、その怪異は起らなくなったという。槌のことを「げんのう」というが、それはこの話に由来している。

十六の井 海蔵寺境内の裏山に、十六の井と呼ばれる不思議な井戸がある。木の下道をたどった崖下にやぐらがあり、ふだんは頑丈な木の扉でふさがれている。寺に申し出て鍵を借り、中に入ってみると広さ八畳ほどの床に十六の穴が水をたたえている。奥の壁に阿弥陀三尊来迎図がはめこまれていたが、現在は鎌倉宝物館に移されている。

三 由比の沢邊を右に見て、耳若宮の舞の榭、

榭の下道を行けば、

八幡宮の御社、

しづのをだまきくりかへし
かへしし人をしのびつつ、

四 上るや石のまごはしの

左に高き大いそ、

阿はばや、速き世世の跡、

七 八幡宮の石段に

立てる一木の大西脚樹

別當公院のかくれしと

歴史にあるは此陰よ

八

こゝに開きし頼朝が

幕府のあとは何かたぞ

松風さちちく日は暮れて

こたへぬ石碑は言めをし

* 拜福寺* (扇ガ谷二丁目二二番)

鎌倉駅西口を出て直進し「今小路」へ入って北へ四〇〇メートルほど行くとJR線の線路際に出たとこを西へ折れて、二〇〇メートルほど道なりに進むと拜福寺の外門がある。臨濟宗建長寺派の寺で、亀谷山拜福金剛禪寺という。縁起によれば源頼朝が死んだ翌年の一二〇二(仁治三)年に北条政子が、臨濟宗の開祖・明庵栄西を開山として建立したもので、のち足利義満が「鎌倉五山」のうち建長寺・円覚寺に次ぐ第三位に列した。ちなみに第四位は淨智寺、第五位は淨妙寺である。

往時は七堂伽藍に塔頭十四を数えたというが、現在は外門・山門・仏堂・方丈などがあるだけで、山門内の二本の柏樹と宋風禪寺様式の前庭に、わずかに往時を偲ばせるものがあるに過ぎない。なお仏殿は江戸時代中期、一七一四(正徳四)年の再建のもので、また柏樹は鎌倉市指定の天然記念物になっている。

寺宝は、国の重要文化財の指定を受けたものに鎌倉時代後期の「木造地藏菩薩立像」と宋画者の「墨茶養牛三配」があり、また「木造栄西禪師坐像」が千葉県指定文化財になっている。ほか、享和二〇年間の「寺務目録」が保存されている。

寺の背後、源氏山山腹の「やぐら」の「一丁」、唐風やぐら」という彩色された岩窟内には鎌倉朝の三輪塔があり、それと並んだ岩窟に伝・北条政子墓の五輪塔がある。また墓地には俳人・高浜虚子と作家・大仏次郎の墓がある。

* 明庵栄西 (しょうあん) 千光祖師といわれ、はじめ天台宗を学んでいたが、一一六八(仁治三)年、二十七歳のとき、中国・宋に留学して禅を学んで帰ったが、また修行の足らぬことを感じ、インド入朝しようと、一一八七(文治三)年、再び中国に渡ったが、目的を達するまでには至らず、中国浙江省の天台山で「臨濟禪」を全傳して一一九一(寛文一)年に帰国した。高僧として多くの信者を擁護し、一一九九(享和元)年、鎌倉に來り、この拜福寺を開山、一一二〇

(寛文十)年には京都東山で建仁寺を開山したのき、建仁寺に戻り、一一二二(寛文六)年に六波羅門に「ついで」を授けられた。

宋国に臨濟宗の開祖といわれるとよく知られ、日本に初めて「茶」を伝えた「臨濟義玄」が茶のたぐいの健康医学を説いたゆえ、「建仁寺」で知られる「建仁寺流禅宗臨濟宗」を開いた。播磨市喜願寺蔵「西園公家宛」は彼の返書で回向に指定されている。

* 八坂神社* (扇ガ谷一丁目三番)

英勝寺の南にある扇ガ谷の鎮守で、銭洗弁天を末社に持つ、もと天三社といった古社である。相馬次郎師常が館の鎮護のため勧請した京都祇園の牛頭天三なので相馬天三社といわれ、また祇園さんと三ついていたが、明治維新後の社寺分離令で八坂神社と名付た。牛頭天三とはインドの祇園精舎を守護した仏神で、日本では素戔嗚尊になり、その荒ぶる御魂を鎮める御霊會(祇園會)が有名な祇園祭となった。ここ鎌倉・八坂神社で毎年七月十二日に行われる祭礼には、祇園祭の立派な山車が出る。

なお相馬師常は、源頼朝が二橋山の合戦で敗れて渡島半島に送られたとき、頼朝を助け、その勢いを盛らした平兼光(相馬)次男で、このとき相馬師常の養子とみられる下谷(平兼光)相馬御厨司を頼いで相馬を名乗っており、のち奥州・藤原泰衡征討の戦いでも功績があり、源頼朝から陸奥行方(郡)播磨相馬司(可)を給わって、「相馬野馬追い」で知られる相馬六万石の祖となった人物である。また「相馬系図」は次のように記している。

平将門一將國一又國(相馬)馬(馬)……(三)五代路……師國一師常

なお相馬師常の墓は寺光明寺の目の裏山にある十位どの殿屋の中の最奥の「やぐら」の中にあるといわれ、いわれている。

北条 政子 永井路子作 より——

——雪が笑っている。

と政子は思った。

——おろかな、この私を、雪までが、あざ笑っている……

三浦義村が公暁を討ちとつたという知らせは、その夜のうちに、政子の許へも報らされた。彼女は、一夜にして、子と孫を一気に失ってしまったのだ。しかも、その際では、裏切りに裏切りが重ねられている。(略)

なぜかくも恐ろしい終末を私は味わわねばならないのか。四十余年間、私は夫を、子供を愛しつづけてきた。その間、一夜だつて、その人たちの不幸を願つたことがあるだろうか。なのに……。

大姫、三幡、頼家、実朝、そして公暁——

それらの子供たちは、まるで、指の間からこぼれ落ちる水のように、私のそばをすりぬけ、不幸の淵を曳きながら死を急いでいった。これが愛の代償なのだろうか。

——これが私が生きたということなの？ (略)

政子は、いま、自分が、荒涼たる孤独の座に、たったひとりで取残されていることを感じていた。

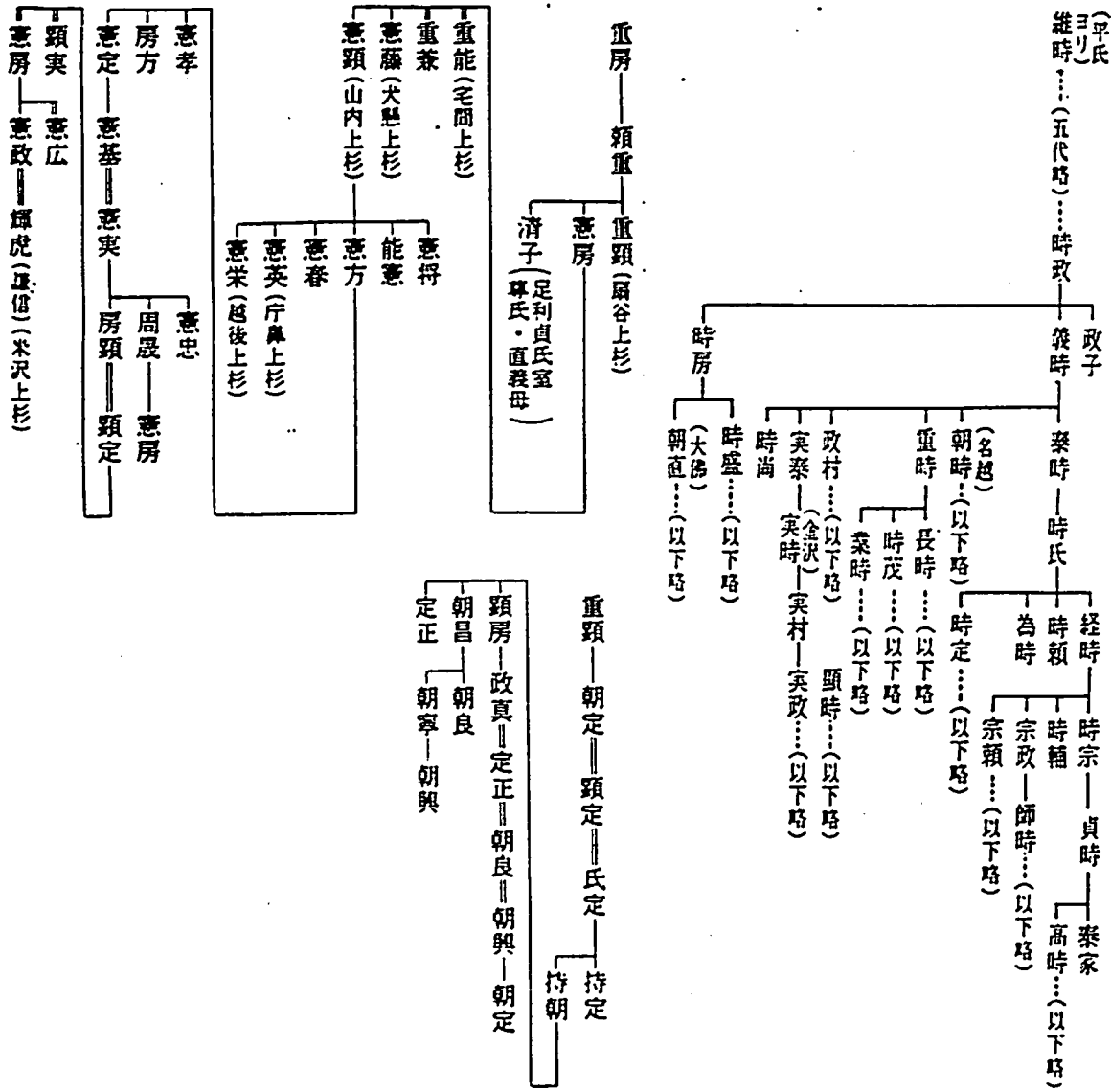
——私はたったひとりぼっちなのだ。

(略)

鎌倉 三上 進作 より——

実朝の抵抗

日一日と増してゆく北条氏の圧迫の中で、実朝は権中納言・左近衛中将と官位の昇進を望み、異常な早さで位を高めていった。京都側の官打ちという狙いがその実現を容易にしたにしろ、自分で源氏の正統が絶えるとの予感が実朝に官位を望ませたとみるのが一般の見解である。東国武士の世界から、すくなくとも精神面では離れ、京風公家の生活にあこがれ、ひたすら趣味の世界に溺れこもつとしたのも、みずからの短命をさつたせいであろう。武士の女を退け、京都から妻を迎えたのも実朝の精一杯の抵抗であった。実朝の好んだのは、和歌・蹴鞠など、東国武士にとっては齒がゆい、柔弱な公卿好みの遊びである。藤原定家から近代の秀歌集や、「万葉集」の写本を贈られると、実朝はなによりも喜んだ。そして、自身「金槐和歌集」をつくる。(略)



あぶつに 阿佛尼 鎌倉中期の歌人。平度繁(佐渡守)の女。安嘉門院の侍女として、四条又右衛門佐とよばれ、藤原為家(定家の子)の後妻となった。

(後妻とせずに、側室とした新説も出た)。のち、仏門に入り、阿仏といひ、北林禅尼と号した。「転寝記」(うたたねのき)と「十六夜日記」(いざよいのくにき)とは、その文学作品(擬古文)として有名。「転寝記」は前半日記、後半紀行。「十六夜日記」は旅行前記・旅行記・旅行後記の三部から成る。この旅行は和歌所の領たる細川荘に関する訴訟のための鎌倉下向である。十六夜日記 (野村八三)



阿 仏 尼

鎌倉五山

五山とは、南宋の高僧制庵(あまのり)が、五山十刹の格式で、政府に仕奉るに由り、鎌倉の五山を定め、五山第一としたとされるが、制度は定かたはな、願位はたびたび変わった。寺格の序列は、寺院の田積の所かに、開創者の社会的地位、時勢に左右されるからである。現在知られている願位は、1位建長寺、2位円覚寺、3位寿福寺、4位浄智寺、5位浄妙寺で、足利義満が定めた。

名数は観光堂伝の「五十一」

江戸時代にも鎌倉への観光客が多くなり、井戸や泉などの名所の名数をそとて五十一といわれる。

●鎌倉十井 泉質の飲料水が豊富に湧出する井戸として珍重された。弘法大師が掘ったという標立ノ井(寛國寺)のほか、数ノ井(小田通り)、泉ノ井(御教寺坂下)、甘藷ノ井(浄智寺)、海ノ井(明王院)、厚土ノ井(海蔵寺)、泉ノ井(圓ヶ谷)、鏡子ノ井(長勝寺)、六角ノ井(飯田院)で10カ所。

●鎌倉五名水 銭洗弁天奥の洞窟内から湧き出る銭洗水は有名。このほか梶原太刀洗水(十三所)、日蓮之水

(文政初年)、上野の水(浄智寺)、金竜水(建長寺)がのびる。甘藷水の替わりには、水(鎌倉十井)を数える説もある。

●鎌倉十橋 当所の名所残の橋は、無だ、いわれなきつが願位深し。三橋社入の和歌集納に「しり処刑を免れた波川六郎兼守が造った歌ノ橋(松本寺内)をいじめ、観音橋(今小路)、浄智橋(御教寺)、東堂橋(本覚寺)、勝ノ橋(寿福寺)、逆川橋(大田四ツ角)、品橋(妙長寺)が残る。建長橋(下馬四ツ角)、筋違橋(下)、十三重橋(北鎌倉)は今はない。

谷と切通し

三方を山に囲まれ、一方が海に面した鎌倉は、起伏する山々のひたつかり谷にわたって開けた面である。この谷を鎌倉谷、谷、谷とは谷戸と呼ぶ。今日に残る田圃まじりの谷にすまわひささているのだ。

切通しは、峠を削り人馬でつた通路である。外部との連絡や防衛の拠点とされた切通しは、鎌倉七口と呼ばれる御教寺坂の切通し、大仏坂切通し、化粧坂切通し、亀が谷坂切通し、目黒坂切通し、朝比奈切通し、名越切通しの7カ所である。

鎌倉三十三観音霊場

- 第1番 杉本寺 十一面観音
- 第2番 宝戒寺 准胝(じゅんてい)観音
- 第3番 安養院 千手観音
- 第4番 坂谷寺 十一面観音
- 第5番 采田寺(西御門)如意輪観音
- 第6番 瑞泉寺 千手観音
- 第7番 光徳寺 聖観音
- 第8番 明王院 十一面観音
- 第9番 浄妙寺 聖観音
- 第10番 報恩寺 聖観音
- 第11番 延命寺 聖観音
- 第12番 教恩寺 聖観音
- 第13番 別願寺 魚籃観音
- 第14番 采田寺(材木座) 聖観音
- 第15番 向福寺 聖観音
- 第16番 九品寺 聖観音
- 第17番 補陀落寺 十一面観音

関東の坂東三十三観音霊場のように、鎌倉にも鎌倉だけの三十三観音がある。鎌倉探訪の目的に霊場のめぐりはいかが。

- 第18番 光明寺 如意輪観音
- 第19番 蓮乗院(光明寺内) 十一面観音
- 第20番 千手院(光明寺内) 千手観音
- 第21番 成就院 聖観音
- 第22番 極楽寺 如意輪観音
- 第23番 高徳院 聖観音
- 第24番 寿福寺 十一面観音
- 第25番 浄光明寺 千手観音
- 第26番 涵蔵寺 十一面観音
- 第27番 妙高院(建長寺内) 聖観音
- 第28番 建長寺 千手観音
- 第29番 電燈院 聖観音
- 第30番 明月院 如意輪観音
- 第31番 浄智寺 聖観音
- 第32番 東慶寺 聖観音
- 第33番 円覚寺 聖観音

北条政子 永井路子 1990 3 文芸春秋

鎌倉―古戦場を歩く 奥宮敬之・雅子 60 7 新人物往来社

鎌倉史話散歩 御所見直好 50 4 秋田書店

鎌倉事典 白井永二 51 5 東京堂出版

鎌倉―中世史の世界― 永井路子 1984 8 岩波書店

鎌倉名所図会 鈴木 亨 55 3 鷹書房

鎌倉今昔物語 しおはまやすみ 1990 5

大系日本の歴史5 鎌倉と京 五味文彦 1988 5 小学館

図説歴史散歩事典 1979 山川出版社

鎌倉 三上 進 46 1 学生社

日本の神々II 関東 谷川健一編 84 12 白水社

日本歴史大辞典 43 5 河出書房

国史大辞典 58 10 吉川弘文館

鎌倉―ポケットガイド― 60 1 日本交通公社

交通公社のるるぶ情報版 横浜鎌倉湘南 63 2 日本交通公社

鶴岡八幡宮(しおり) 鶴岡八幡宮社務所

定本日本の唱歌 堀内敬三著 昭和四五・八 実業之日本社

日本教科書体系近代編第25巻 唱歌 海後宗巨編 昭和四〇・九 講談社

エチケット守ってきょう一日をさらに楽しく

◎電車の座席は譲りあって一人でも多く座れるようにご協力ください。

◎道路は郷土研究会の専用道路ではありません。地元の方の生活の邪魔にならないように！

◎史跡めぐりは「団体行動」です。ムードにひたりながら、ゆっくりとお歩きになりたいお気持ちもわかりますが、今日は「みんなのペース」にあわせてください。わがまま歩きは、お友達と次の機会に――！